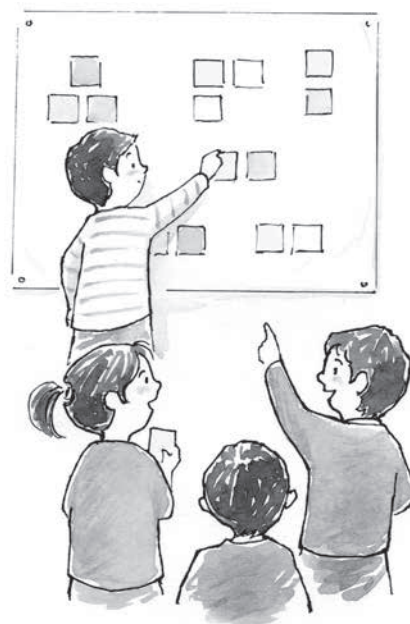


総合的な学習の時間における 探究の意欲に関する考察



石田 好広 Yoshihiro ISHIDA
人間学部児童教育学科教授

1. はじめに

総合的な学習の時間の指導にかかわっている現場の教員は、探究過程における課題設定の過程の指導に困難を抱えている。子どもが主体的に問題解決を行い、充実した学習を行うためにも、この課題設定の場面でどのように子どもに探究意欲をもたせるかが大きな課題となっている。本稿では、総合的な学習の時間において探究意欲を高め、能動的な探究活動ができるための指導の在り方について論じていく。

2. 研究の背景と目的

総合的な学習の時間が創設されたのは、平成10年の学習指導要領である。創設されて、20年近く経とうとしている。その中で探究的な学びを行っている学校ほど、全国学力・学習状況調査の結果が高いことが明らかになっている¹。この結果を受けて、文部科学省は、探究的な学びの重要性を指摘し、平成30年度告示の学習指導要領では、高等学校の総合的な学習の時間を「総合的な探究」とし、他に、古典探究などの「探究」という名称の付く科目を多数設定した。このように、探究的な学びの重要性が高まっており、本領域の役割はこれまで以上に大きくなったと言えよう。総合的な学習の時間において、より

充実した探究学習を展開するためにも、学校現場での指導のあり方について再考する必要がある。

文部科学省は、学習指導要領の中で、総合的な学習の時間の単元計画は、課題解決や探究的な活動が発展的に繰り返されること、総合的な学習の時間は協働的な学習を基盤とすることと述べている²。また、探究学習とは、①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現という4つの探究過程から構成されていることを示している。それぞれの内容は、①【課題の設定】体験活動などを通して、課題を設定し課題意識をもつ、②【情報の収集】必要な情報を取り出したり収集したりする、③【整理・分析】収集した情報を、整理したり分析したりして思考する、④【まとめ・表現】気付きや発見、自分の考えなどをまとめ、判断し、表現するである。筆者(2017)の調査によると、この4つの探究過程のうち、教員の多くが、①の課題の設定に難しさを感じている。特に、その中でも、探究を続ける学習意欲と明確な課題設定に悩んでいることが受け取れる³。

そこで、本稿では、総合的な学習の時間において継続的に探究活動を行うことのできるような探究意欲の高め方について焦点を当て、課題設定の困難さを解決するための方策について述べていく。

3 学習意欲を高めるための要因

課題の設定の過程での探究意欲を高める方策を探るために、まずは、探究学習に絞り込まずに学習意欲をどのように高めていくのかという、一般的な視点から検討していきたい。

市川(2012)は、「学習動機の二要因モデル」を説いている⁴。市川は、学習動機を分析・分類し、学習動機は、①実用志向(仕事や生活に活かすために)、②報酬志向(報酬を得る手段として)、③訓練志向(知力を鍛えるために)、④自尊志向(プライドや競争心から)、⑤充実志向(学習自体が楽しいから)、⑥関係志向(他者につられて)の6つのタイプになることを示している。そして、この6つのタイプを「学習内容の重要性」を縦軸、「学習の功利性」を横軸として、二次元の座標軸の上に位置づ

けている。

探究学習における学習意欲は、児童が自ら課題を探究していくために、その根底に知的好奇心や謎を解き明かしたいという思いが必要になるはずである。だとすれば、「学習の功利性」ではなく、学習者にとっての「学習内容の重要性」が探究学習の動機付けと関連が強い。この6つのタイプの中で、探究学習における学習意欲は、「学習内容の重要性」の要素の強い、⑤充実志向(学習自体が楽しいから)及び⑥関係志向(他者につられて)が該当すると考えられる。同様に、下田(2005)は、学習内容に対して子どもの「内的必要感」や「内的関係性」の欠如が、学習意欲低下の原因であるとして、学習内容と現実社会の事象との有機的つながりを強調している⁵。

4 探究課題の設定

文部科学大臣補佐官の鈴木(2018)は、探究学習は、①課題発見、②課題設定、③課題解決の3つのプロセスに分けることができるとしている⁶。これは、探究学習の過程の中の、課題の設定の過程を、課題発見と課題設定に分けて捉えているということである。鈴木は、このプロセスの中で、課題発見の難易度が一番高いとの考えを示している。その理由として、これまでの教育は、課題解決ばかりやってきており、これまで課題発見の部分に手を付けてこなかったからであると指摘している。課題を発見し、課題設定に至るための、課題として扱うテーマやテーマとの出合わせ方に関してどのような工夫が必要になってくるのであろうか。

市川や下田の述べていることから、学習意欲を高めるためには、内容的に解決したいと思える課題であり、課題が明確になっていることが必要であろう。では、そのような探究課題とはどんなものだろうか。総合的な学習の時間の目標の(2)として「実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。」と書かれている⁷。実社会や実生活を題材として扱うことは、現実的な課題をテーマに据えるということであり、自分自身との関係性や課題解決の必要感が高く、目的意

識も明確になる。それが、探究意欲につながると言えよう。また、実社会や実生活の中には、正解のない課題が多くある。正解のない課題を取り上げ、教師が解をもっていない学びを行うという点は、子どもが主体的に探究する上で必要性が高く、市川の言う充実志向につながるものだと考える。

次に、学校現場の実践研究から、課題設定について考えていきたい。長野県伊那市立伊那小学校（以下、伊那小学校と記す）の示す探究課題設定の条件がある⁸。伊那小学校は、総合的な学習の時間が創設される前段階で、研究モデル校として総合的な学習の時間を実施していた学校であり、いまだに、総合的な学習の時間の研究と実践のトップランナーとして全国から注目されている。総合的な学習の時間の長い実践経験の中から挙げている探究課題設定の条件は、以下の4つである。

1. 共通の関心事であり、子供が胸をときめかすようなものであること
2. 教材と関わって、「こうしたい」「どうしてだろう」という求めが次々に生まれ、その求めが具体的なめあてになって、連続していく見通しがもてること
3. 展開される学習活動がどの子にとっても可能であり、しかもやりがいがあること
4. どの子にもその子にふさわしい「学力」を身に付けることができるものであること

これらは、子どもの姿として検討されている点が特筆できる。

東京都江東区立八名川小学校（以下、八名川小学校と記す）は、ユネスコスクールに登録し、総合的な学習の時間を中心に、熱心にESDに取り組んでいる学校である。その八名川小学校の前校長の手島（2017）は、ESDで主体的・探究的に児童・生徒が学ぶためには、学習の導入部で「子どもの心に火をつけろ」と述べている⁹。伊那小学校と同様、こちらも、「こうしたい」「どうしてだろう」という課題を発見するようなテーマとの出会い、言葉を変えるなら、子どもが探究したくて仕方がなくなるような強い動機付けをもつ事象との出会いの重要性を示している。課題の設定の部分で、いかに子どもに本気で学習に取り組もうとする意欲を高めるか、子どもの学びに必然性があるかがとても大切だと考えていることが分

かる。

5 個と集団の課題の関係性

探究意欲は、個人の疑問や関心に起因するものである。そこで、探究意欲を高めるために、個人の課題を尊重することはとても重要なことである。一方で、総合的な学習の時間に関して、学習指導要領の解説の中で、「課題の解決において、主体的に取り組むこと、協働的に取り組むことが重要である」と述べられている¹⁰。そう考えると個と集団の課題の関係性が問題になってこよう。

個人の探究課題と学級や学年の集団の探究課題とのずれは、個人の探究意欲を削ぐ可能性がある。また、個人の課題を尊重し、個人の探究活動に終始しては、協働性に反することになる。

この点について、前述の伊那小学校は示唆に富む考えを示している。伊那小学校では、学級を「感情共同体」としてとらえている。大きな課題を共有化するが、細分化された細かな課題については、調べてみたいと思う内容を選択して探究に取り組ませている。共通の土俵で探究を行うだけでなく、個人の探究意欲を保証する手法として着目できる。

探究の過程で個人の探究課題と学習集団での学習課題との関係性が大きな要素だと言えるのではないだろうか。そこで、個人の課題を集団の課題へと統合させ、しかも、伊那小学校のように、個人の課題が失われないように工夫することが重要になってくる。一方で、個人として探究意欲が十分に高まっていない場合でも、集団の課題設定の段階で、その児童の探究意欲を高めるよう工夫すべきである。むしろ、集団へ課題を練り上げた方が個人の探究意欲が高まるようになることが理想ではないかと考える。学習集団の合意のもと集団の課題設定を行ったり、集団の中での課題と上手にすり合わせたり、さらに、集団の課題を設定しつつ、個人の課題も残して探究活動を進めたりするためには、KJ法やピラミッドチャートなどの思考ツールの活用を積極的に行い、工夫していくべきであろう。

6 探究活動に火が付かない理由

学習意欲、探究意欲といった視点から述べてきたが、どの教師もすべての授業において、どのように子どもの学習意欲を高めるか、常日頃から意識し工夫して授業展開をしているはずである。しかし、総合的な学習の時間を中心にESDに取り組んでいる学校でさえ、課題設定の場面の指導の難しさに悩んでいるという話を聞く。

では、なぜ、手島が言うように探究学習に「火が付かない」のであろうか。これまで、教師は、予定調和的な授業を展開し、児童が熱心に学んでも結局最後は教師が答えを示したり、まとめたりしてしまっていたからではないだろうか。そうなると、子どもは、自ら課題を設定する必要性を感じないであろう。また、前述した鈴木が言うように、課題発見や課題設定にも取り組んでいくことが少なく、教師も子どももその経験が少ないと言える。

そこで、総合的な学習の時間において、主体的に問題をつかむ学習はどの程度実施されているのかについて調査する必要があると考え、本学、教育実践演習を受講している教職を目指す学生52名に対して、小中学校時代の総合的な学習の時間の経験についてアンケート調査を実施し、課題の設定の場面でどのように課題設定をしていたかについて尋ねた。

設問1「教師が課題を設定していたか」について、「とてもそう思う」38%、「そう思う」46%という結果であった。半数以上の学生が、教師が課題を設定していたととらえていることが分かる。

次に、設問2「体験活動や資料から課題を設定した」については、「とてもそう思う」27%、「そう思う」38%であった。60%を超える学生は、体験活動を通して、もしくは資料を調べたりする中から課題を設定していた経験をもっていることが分かる。

さらに、設問3「話し合って課題を設定していた」に関しては、「とてもそう思う」8%、「そう思う」21%という結果であった。子どもの意見を取り入れて課題を設定することが探究意欲を高めるためにとても重要になるが、肯定的な回答が30%に満たない結果であった。こういっ

た活動の経験がとても少ないことが分かった。

この3つの調査結果を総合的にとらえると、自分たちで課題を設定した経験のある学生がとても少ないことが分かる。課題設定のプロセスで学び手である子どもの主体的な学びが実現していることが、探究意欲の向上につながるはずである。個人のレベルで体験活動や資料を読み取ることを通して子ども自身が課題を設定する機会は比較的多くあるものの、教師主導型の課題設定の授業が多い現状が分かる。先に述べたように、探究意欲に関しては、協働性もとても重要な要件であると言える。そこで、課題を設定する場面で、子ども同士で話し合いもち、課題を練り上げていくことがその後の活動に大きな影響を及ぼすはずである。ところが、この結果を見ると、個々の関心をもった内容について、話し合い、課題設定のために、関心事の共有化の機会を設定していないことが分かる。知識伝達型の授業を受け、児童・生徒の時代に受動的な学びを経験した教師にとって、学習テーマについて関心をもち、主体的に課題をつかんで探究的に学ぶプロセスに関して、学習指導の方法としてイメージしづらいのかもしれない。

7 研究のまとめ

子どもの探究意欲を高めるために、学習理論や学校現場の事例から導き出された方策等について述べてきた。探究意欲を高めるためには、まずは、子どもの実態を的確にとらえ、学習テーマとのかかわりやレディネスなどから、どう事象と出会わせるのかを構想することがとても重要になってくるだろう。それだけに、学習のテーマ設定に教師としての力量が問われるのかもしれない。

八名川小学校で、「子どもの学びに火をつける」実践を行うことのできる理由は、実は、探究学習の積み上げによって、「火が付きやすい」土壌ができていないからではないだろうか。八名川小学校の教員は、『ここ数年で、子どもに「こういうことを調べたい」とか「こんな発表をしたい」という思いが強くなってきた。「自分たちでアンケートをとって調べたい」なんて普通に言い出す』と述べている¹¹。これは、総合的な学習の時間の学びによって、

子どもが自分で課題を設定し、自ら探究する探究能力が育ったと言えるだろう。実は、子どもが探究の過程を理解し、探究して学習をすることの魅力を感じることで、そして、探究活動の経験値を高めることが、何よりも課題設定の困難さを解決する秘訣と言えるかもしれない。そして、教師も同様に、探究学習の指導の経験値を高めていくことが必要になってくるだろう。

今回の研究で、個人の課題設定と集団の課題設定との関係性の重要性が明らかになった。今後、個人の課題と集団の課題のより良い関係性と個人の課題を集団の課題へ練り上げの手法についてさらに研究を深めたい。

参考資料・引用文献

- 1 文部科学省の示す総合的な学習の時間の探究過程「総合的な学習の時間の成果と課題について」、p.8 (2019.11.29. 最終確認)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryu/_icsFiles/afieldfile/2018/10/10/1409925_4.pdf
- 2 小学校学習指導要領解説（平成29年度告示） 総合的な学習の時間編、p.92・p.122
- 3 石田（2018）、「未来へ紡ぐ児童教育学」目白大学人間学部児童教育学科／編、三恵社、pp.256-257
- 4 市川（2015）、『学ぶ意欲の心理学』、PHP新書、pp.46-53
- 5 下田好行、第1章・第2節 授業における学習意欲の向上策の基本 学習意欲向上のための総合的戦略に関する研究－「活用型・探求型の教育」の教材開発を通して－
（課題番号 17530679）平成18年度 科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果最終報告書
- 6 鈴木寛（2018）、「“想定外”と“板挟み”を乗り越え生きる力を養う「探究学習」とは「Learning Design」」。07-08、pp.29-31
- 7 小学校学習指導要領解説（平成29年度告示） 総合的な学習の時間編、p.8
- 8 長野県伊那市伊那小学校 「長野県伊那市立伊那小学校の学習テーマの決定の方法」
www.l.s-cat.ne.jp/iwase/jissensouko/sonota/ina.htm (2019.11.29. 最終確認)
- 9 手島利夫（2017）「学校発・ESDの学び」教育出版、pp.28-32
- 10 小学校学習指導要領解説（平成29年度告示） 総合的な学習の時間編、p.17
- 11 手島利夫（2017）再掲、p.128